異文化交流編

わたしが海外の文化と出会った日

平成２３年度　コロンボ日本人学校派遣
山口市立二島中学校　教諭　藤井　信宏

ずっと英語を学んできたわたしが海外を強く意識し、異文化に飛び込みたいという憧れを抱き始めたのは、もう２０年以上も前のことである。

当初は漠然とした思いだけであったが、１９歳（当時大学１年生）のとき、ふと目にした１枚のポスターからすべてが始まった。そのポスターで紹介されていたあるホームステイプログラムに参加してアメリカに渡ったのが、わたしにとって最初の海外への挑戦であった。以降、何度か海外で生活する機会をいただいてきたのであるが、それらの経験から得たものは、今の人生の中で本当にかけがえのないものとなっている。

今後海を渡る多くの若い世代たちに、少しでも自分の通ってきた海外挑戦への「夢」「希望」「葛藤」などの思いを伝えることができたらと思い、今回筆を執り、当時の思いを呼び起こしながら書き綴ることにした。細かい１つひとつの出来事はあまり描写していないが、どこにでもいる１人の日本の若者がどのように海外に興味をもち、どのようなきっかけで海外と出会い、どう受け止めて成長してきたかを、読者の方々に伝えることができれば、この上ない幸いである。

ホストファーザーは日本人　～アメリカホームステイ編～

アメリカにホームステイをすることが決まったとき、現地でのホストファミリーとなったジョンソン一家から手紙と写真が届いた。その写真を見て、私は一瞬戸惑った。そう、写真の中に映っている家族の父親とおぼしき人物が日本人だったからだ。アメリカ人というと、当時よく見ていた「大草原の小さな家」の父親役であったダンディなチャールズ・インガルスのような、ブロンドヘアに青い瞳といった勝手な想像が頭の中に膨らんでいたので、正直なところ少し拍子抜けした気持ちであった。

そしていざ、自由の大地、アメリカへ！ステイ先は、アメリカ北西部にあるワシントン州の Longview 市（人口はわずか３万７千人程度：2016 年度）にある、閑静な佇まいの住宅地の一角にあった。初めて降り立った海外の地に興奮を覚えながらも、見るものすべてが新鮮で、わたしはアメリカの大地に降り立った自分が少し大きくなったように感じた。

美しい Longview の市内景観

さて、ホストファミリーであるが、前述の通り父親は日本人である。名はブック・ジョンソンさん。髪型は七三分け、背は１６５ｃｍ程度

でわたしより低く、少しずんぐりした胴長短足の典型的な日本人体型。そして黒縁のめがねをかけた、まさに日本のサラリーマンを絵に描いたような風貌であった。しかし、日本語訛りがありながらも、英語はペラペラで、そのギャップに最初は驚いたものである。

ホストファーザーは日本人（右）

ホームステイ初日の夜、彼は私に日本語でこう言った。「信くん、君がここに来た一番の目的は何だい？」わたしは答えた。「・・・英語を勉強するためです。」

その答えを聞いて、ブックさんは少し考えた後、わたしにこう言った。「わたしは、これから君が日本に帰る日まで、日本語を話さないようにするよ。いいね・・・？」

それからホームステイが終わるまでの３週間、彼は本当に一度もわたしに日本語を話さなかった。食事のときも、家族で旅行に連れて行ってくれたときも、２人きりで話をしているときでさえも。朝から晩まで英語で生活することの大変さを初めて味わい、生まれて初めて英語で夢まで見た（もちろん夢の中の英語もつたないものであったが・・・）。また、気候の違いから体調を崩してホームシックになりかけたこともあった。せっかくアメリカに来たのに、言いたいこともうまく伝えられず、わたしは「早く日本に帰りたい」と思ってしまっている自分がいることに気づいていた。

そんなホームステイもいよいよ最後の夜を迎えた。最後の日の夜、ブックさんがわたしにこう言った。「信くん、君の英語も少し上手になってきたのに、もうお別れだね。君が英語で言いたいことを言えない姿を見て、わたしも日本語を話そうかと何度も思ったよ。でも、君も最後までよく頑張ったね。」

プログラム途中で体調を崩してホームシックにかかってしまい、自己嫌悪に陥っていた自分だったが、このホストファーザーの一言で、すべて救われた気がしたことを今でも覚えている。

私の初めての海外経験は、少しほろ苦い思い出となってしまった。それでも異国の地での一場面一場面が、その後も時々浮かんできては消え、その後の自分を奮い立たせてくれるさらなる海外挑戦への起爆剤となったのである。

スリリングなバックパック旅行　～ヨーロッパ編～

さて、日本に戻った私はその後、少し海外に対する心の垣根が低くなったのか、大学２年時には１人でヨーロッパのバックパック旅行に出かけた。事情があり、途中まではイギリスに短期留学していた姉とフランスで落ち合い一緒だったが、ドイツの駅で姉と別れて初めて異国の地にポツンと１人取り残されたあのときの不安感や興奮は、それまでに経験したことのないものであった。ちなみに、海外に限らず、日本でもユースホステルの会員証を取得し

て泊まり歩くなど、旅の魅力にとりつかれたのもこの頃であった。当時のわたしの愛読書は、旅のバイブルとして今も名高い沢木耕太郎の「深夜特急」であったことも、恐らく多くの読者の共感を呼ぶに違いない。

さて、このときのヨーロッパ１人旅では、最初フランスに入り、ドイツ、ベルギー、そして最後はフェリーでドーバー海峡を渡り、イギリスを訪れた。ホテルも一切ブッキング（予約）なしで、まさにノープランの飛び込み旅行であった。初めは不安だらけであったが、スリリングな非日常の毎日は刺激的だった。行く先々でインフォメーションセンターを訪ね、安いホテルを探してもらった。

もちろん、トラブルは何度も経験した。フランスでは２度もだまされてお金を取られ、ベルギーではホテルに戻る時間が遅くなって締め出しの状態になって中に入れなかったり、ドーバー海峡を渡るフェリーを予約できずに予定外の足止めを食らったり・・・旅の知識も技術もなかったため、このようなハプニングはたくさん起こったが、旅先の安宿で出会った世界の若者たちと仲良くなり、情報を交換し合ったりする中で、英語圏以外の人とのコミュニケーションツールとして英語が大いに役立つことを、身をもって知った。

旅行から帰っても、その旅の刺激は強烈に、そして鮮明に頭に残っていた。その記憶は薄れていくどころか、日を増すごとに新たな刺激を追い求めるようになった。そして、２年後の大きな挑戦へとつながることになる。

海外で日本を教えるボランティア　～オーストラリア編～

大学４年生となり、就職先を真剣に考える時期となった。あれだけいつも一緒にいた友人たちとも、頻繁に会うことが少なくなった。周りの友達が皆、就職活動や採用試験の勉強に勤しむ光景は、楽しいキャンパス生活の終わりを告げているように感じられ、切なさも感じる時期であった。

私はこの頃、姉のアドバイスもあり、ある一つのプログラムに参加することを既に決めて、そのための資金を作るためにアルバイトに明け暮れていた。そのプログラムとは、「インターナショナル・インターンシップ・プログラムス（略して I.I.P.）」というものである。海外で語学習得を目指しながら、現地の学校で日本文化を紹介するというボランティアで、期間は約 10 ヶ月間である。

大学を卒業して本来は就職する年に、当時病弱であった母親を残して海外に行くという選択肢は、はじめはなかなか家族に言い出しにくいものであった。しかし、わたし自身の強い希望と姉の後押し、そして最後は母親の理解で、何とかその思いが叶えられる格好になった。自分のわがままを通してくれたこのときの家族の理解とサポートには、今でもとても感謝している。

オーストラリアではニューサウスウェールズ州の奥地で９ヶ月間を過ごしたが、３ヶ月ごとに学校を変わり、実に１ヶ月半ごとに居住地を移り住み、６つの家庭でホームステイをした。日本人が１人もいない（訪れることさえない）場所であったため、最初は私という日本人がこんな辺鄙な片田舎に突然来たこと自体が、彼らのコミュニティで大きな反響で受け止

められているように感じた。

昼間は学校で日本語や日本文化を教えたが、慣れるまでの期間は大変であった。当時は今ほどインターネットが普及していなかったので、渡豪する前には日々図書館に通い、日本文化についての知識やネタを仕入れるなど、随分たくさん「授業の仕込み」を行ったものである。しかしそれだけの準備をしてきたつもりでも、なにぶん大学を出たての教職経験のないただの若者。若さと情熱、冒険心以外何のスキルも持ち合わせていなかった。つたない英語力を駆使しての、出たとこ勝負の授業の日々であった。そして相手はやはり子ども。最初こそ見慣れない日本人を前に好奇に満ちていた子どもたちの青い瞳も、こちらの限定されたボキャブラリーと乏しい英語力で、次第に輝きを失っていくのが分かったときはとてもつらかった。それでも教壇に立ち続けなければならなかった。今振り返ると、そこで試行錯誤しながら奮闘したことで､自分の英語力はこれまでにないくらいに鍛えられていくことになった。今、英語教師として、自分自身の礎となり、原点となっているのは、まさにここでの経験である。

「国際理解は身近な一歩から」「海外に出て日本のよさを再認識する」などとよく言うが、わたしの場合も、オーストラリアで日本のことを紹介することを通して、自分自身が日本文化について勉強したり考えたりした。また､「わたし」という一個人が、彼らにとっての日本人像となることを強く感じたものである。

オーストラリアは農業大国である。小麦、大麦、カノーラといった穀類をはじめ、養豚、羊の放牧、ダチョウからエミュー、さまざまな家畜を飼い、広大な土地を抱えて大規模な農業を営んでいる家庭も多かった。内陸部の荒野は乾燥地帯で「アウトバック」と呼ばれる。町から町の間は数十キロもあり、その間はただただ地平線の灼熱の大地が続いている。走る車は砂埃を立て、舗装すらされていない赤茶けたむき出しの凸凹道のはるか先に、蜃気楼に揺れる地平線が広がる。圧巻の光景である。

そんな農業で働く男たちの集まる場がある。それがパブである。数人で飲む場合は、順番におごり合うのが暗黙のルールとなっている。わたしもよく連れて行ってもらったものである。パブや通りの店で売っているミートパイ、ソーセージロールなどのオージーフードは、今でも無性に恋しくなるときがある。また、週末になると、大抵どこかで BBQ パーティーが催され、飲み物持参（BYO：Bring your own）で出かけ、遅くまでビール片手に語り合ったものである。

こうして現地のコミュニティにどっぷりと浸かり、彼らの知る唯一の日本人として過ごした日々は、かえってわたし自身に「日本人」としてのアイデンティティーを知らしめてくれた。それと同時に、わたしを温かく受け入れてくれた現地の人々のおかげで、渡豪前と比べると随分積極的で自信に満ちあふれた新しい自分も発見することができた｡「大学を卒業して就職」という既定路線に敢えて乗らなかった自分を、若かりし当時は少し誇らしく感じても

いたと思う。人生の分岐点で初めて真剣に将来について迷い、自分の可能性を追いかけ、リスクを冒しても冒険してみたいと思う若さと情熱は、多くのことを可能にするものだと感じた。オーストラリアで過ごした時間は、わたしの中に新たな価値観を植え付けてくれたかけがえのない人生の宝物である。

さて、このように、思い出は１つひとつ挙げれば数え切れないのであるが、プログラムも終盤を迎えたある日の忘れられない出来事を是非ここで紹介したい。

その日はわたしの誕生日であった。そのときのホストファミリーが、わたしをいつものようにパーティーに連れて行ってくれた。それ自体は本当にいつものことであり、わたしも彼らに言われるがままに同行した。さて、会場に着いてみると、そこにはなぜか、自分の知っている顔ばかり。また、これまで一緒に生活したホストファミリーもすべてそろい、総勢 60 人以上の人が集まっていたのではないだろうか。その状況になっても、当時のわたしはまだ何が起こっているのか理解できていなかった。読者の皆さんはもうお分かりと思うが、これはわたしへのサプライズ誕生パーティーだったのである。日本ではあまりこのような習慣はなかった（今でもあまりしないと思うが）ので、これが人生初のサプライズパーティーであった。胸に熱いものがこみ上げてきた。そして、多くの仲間と語らい、宴もたけなわとなった時間に、パーティーの仕掛け人の１人であるジョン（以前のホストファーザー）が、「Nobby, here's an international call to you.（ノビー、国際電話だ）」と言って受話器を私に差し出した。会場が一斉にしんと静まりかえった。静寂の中、皆が見守る中、受話器に耳を当てた。聞こえてきたのは、懐かしい声―。それは、母の声だった。母の温かい「誕生日おめでとう―。」という声が胸に響いた。わたしは言った。「ありがとう。母さんも、おめでとう-----。」

実は、わたしと母の誕生日は、奇遇にも同じ日なのである。女手ひとつで私たち姉弟３人を育ててくれた母は、晩年は病弱でやせ細りながらも、いつもわたしたち子どもを誇りに思ってくれた偉大な母であった。オーストラリア人は、家族を何よりも大切にする。その彼らの粋な計らいによって、たった一本の国際電話が、遠く離れた親子の絆をより強く結んでくれたのである。電話口で涙を流すわたしを見て、会場は大いに盛り上がった。その熱気が受話器の向こうにも通じたのであろうか。英語が全く分からない母の声も震えているのが分かった。「本当にいい人たちに巡り会えたねぇ。オーストラリアに行ってよかったねぇ。」わたしは大粒の涙を流しながら、集まってくれたすべての人々に心からの感謝をこめ、英語でスピーチした。

サプライズパーティーの最後にみんなの前でスピーチ！

こうして、わたしの一大チャレンジは、いくつもの素晴らしい出会いと別れを経験して幕を下ろすことになるのである。

ちなみに余談だが、英語を全く話せないわたしの母に、日本語を話せないオーストラリア人の彼らが、どのようにコンタクトをとったのか。しかも最も難しいとされる電話で・・・。実はこれに関しての面白いエピソードがある。そ

のときのことをテーマに、いつだったか高校で英語教師を務めるわたしの姉が英語で書き綴ったものがある。本編の最後に掲載したので、是非英語のまま読んでいただきたい。英語の発音にまつわる面白いエピソードもあり、英語学習者にとって興味深いものであると思う。

「挑戦」する姿勢こそ！　～スリランカ コロンボ日本人学校編～

プログラムを終えて帰国したわたしはその後、英語教師の道を選び、現在に至る。その間、台湾の視察プログラムに参加して勉強したこともあったが、その後しばらくは国内の現場で教育実践と経験を積んだ。そして再び、在外教育施設派遣への挑戦を目指すことになる。

実は、在外教育施設のことはこの仕事に就いてから知ったのではなく、その前から知っていた。この道を選んだ１つの理由は、いつか在外教育施設派遣に応募して、海外で教育実践を行ってみたいと思ったことにある。

派遣が決定したのは、平成２２年１２月のことだった。赴任先がスリランカであることを伝えられた日、家族会議を開いて最終決断をした。そう、これまでと最も異なるのは、今度は家族を伴っての赴任であるということである。

実は、派遣先を告げられたとき、少し迷った経緯がある。それは、スリランカでは、内戦が収束したばかりであったため、主要都市ではまだバス爆発テロなどの事件が起こったりしていたからである。

スリランカという国で起こった内戦について少しだけ触れておこう。スリランカは、シンハラ人率いるスリランカ政府軍とタミル人率いるタミル・イーラム解放のトラ（LTTE）のと間で約２５年間(1983-2009)もの間、内戦が行われ、7万人を超す犠牲者を出した。アジア最悪の内戦とも言われたという。わたしが赴任したときは、その爪痕がいたるところに見られ、街中にもライフルを構えた政府の軍人がよく立っていた。治安的には特に大きなトラブルに見舞われることはなかったが、家族を連れて赴任をすることで、事の大きさを改めて感じることは多かった。

日本人学校の教師として赴任されたわたしは、３年の赴任期間ずっと小学部の担任を受け持つこととなった。最終年度は、教務主任をしながら３・４年生の複式学級担任をし、中学部の英語も教えるというなかなかハードな分掌を与えられたが、やりがいを感じながら充実した日々を送った。日本中から同じ志を持ってやってきた教員仲間とは、家族同然の付き合いとなった。

日本人学校の教員仲間たちと

この３年間で見たもの、出会った人、すべてが財産となった。経済格差の大きい社会構造の中、貧困のスパイラルに陥って抜け出せない人たちがいた。しかし、そんな貧困の中でも夢と希望を持って生きる子どもたちがいた。多くの日本人との出会いもあった。スリランカに安住の地を求めた日本人、異国の地で内戦後の復興支援に尽力する日本人の生き方に触れ

たとき、「人の生き方」に対する価値観が変わった。また、高度な日本の建築技術を取り入れて学ぶスリランカ人がいた。日本の経営方式を敬い取り入れ、大成功を収めた陶器製造会社のスリランカ人もいた。彼らの日本に対する敬愛の眼差しで、日本が国際的にいかに偉大な貢献をしてきたか、先人の偉大さを感じた。そして、「スリランカに住む日本人の子どもたちに日本と同じ教育を」という強い願いをこめて学校を建造した人たちと、そんな日本人学校に縁あってやってきた教師と子どもたち-----。いくつもの運命が重なり合って人と人とがめぐり合うということは、まさに奇跡としか言いようがない。

わたしは今、日本で英語教師を続けている。これまで幾度も海外の文化に触れ、挫折も味わった。それでも志をもって生活してきた日々は、自分の歩んできた誇れる道である。教師は、人生のサクセスストーリーよりも、失敗した経験の方が何倍も役立つことが多い職業である。共感できるからだ。しかも、失敗や挫折を重ねて歩んできた道の方が、新たな気づきや学びへとつながるものである。

わたしは、帰国してからの方が、それまでよりも教育に対する熱い思いが増したように感じている。きっと、たくさんの人生経験を積む中で、「次の世代に伝えたい」と思うことに、自分自身がたくさん出会ったからなのではないかと思う。だからこそ、「失敗や挫折を恐れるな」という教訓を、自分の挑戦し続ける姿を示すことで、これからの子どもたちに伝えていきたい。そして、勇気をもって挑戦する子どもの気持ちをすっと後押しできるような教師になりたいと願い、今日も教壇に立ち続けている。

オーストラリア番外編　英語エッセイ

A Special Birthday

I have a brother 5 years younger than me. His name is Nobuhiro. After he graduated from university, which is about 20 years ago, he went to Australia. His main purpose was to learn English, but he couldn't afford a language school. So, I recommended him to join an internship program where he teaches the local students Japanese and Japanese culture, staying with an Australian family and leaning Australian culture. It still cost something, but it was kind of reasonable way to stay in Australia.

My mother was living alone while he was gone. One day, my mother called me and said, "Nobuhiro seems to be in trouble. Today I got a phone call from someone who speaks English but I didn't know what he was talking about. What I barely heard was 'Nobu', 'phone', and 'Pari'. I think something bad happened to him and he must be in Paris now." I said to my mother, "It's not likely to happen. Besides, if he said the city name of France, he should have said 'Paris'. Did he say S at the end of pari? But it was impossible for my mother to listen correctly to the sound of S. So I told her to tell him my phone number next time he called her I helped her practice saying my phone number in English.

A few days later, I got a call from that Australian guy, which meant my mother was successful in telling him my phone number in English. "Good job, Mom," I said to myself. Anyway, here is what I heard from him. "Nobu's birthday party is coming soon. We are going to hold a surprise party for him. And we are thinking of giving him a surprise present. It's a phone call from his Mon. So please tell her to make a phone call to this number ××× on November 20th. At 9 pm sharp of Australian local time."

I told my mother what this man had been trying to tell her. My mother did exactly what he asked her on November 20th. Needless to say, my brother was very surprised and shed happy tears when he heard his mother's voice on the codeless phone: we didn't have cellar phone in those days. My mother was also very happy to hear her son's voice on her own birthday. Actually, my mother and my brother have the same birthday!! Everything went perfectly well in the end. So I didn't consider much about what caused my mother misunderstanding. Why did she think that Nobu was in Paris?

Now as an English teacher, I often teach my students important tips to listening to English. Sound change is one of them. T and T sounds often change into R sound. Pudding sounds like "purin", water sounds like "wara", and the Beatles' famous song "Let It Be" sounds like "Leribi". Now I know my mother heard it correctly. His pronunciation must have sounded "pari", not "party". My mother is now in heaven and I can't see her any more. But every time I happen to hear this type of sound change, I remember my mother and that special birthday.